

信 毎 歌 壇

小池 光選

車上の雪落さず走り来しへるま四辻まがるとき雪
ばらまきぬ (長野市) 池田よし江
一日に四種三度の品眼業中実には差す正確に差す
「いちごってバナナみたいになってるの？」青果
売り場は童話の世界 (長野市) せきたつお
人生をやり直したいとは思はねど梅に白梅紅梅の
あり (箕輪町) 向山 政俊
甘酒の瓶ぶら下げて善光寺仲見世通り行く留學生
(小諸市) 加藤 陽介
聞き易き片方の耳近づけて受け付けの声聞かむと
する老い (安曇野市) 東野 行品
職を退き善きことひとつ全真に暗誦させた「雨二
モマケス」 (小諸市) 星野 直人
餌探し夜の雪野を行き来する森の生き物思ひつ眠
る (飯綱町) 坂井 寿男
わが庭に雀の群れの遊びをりお天良良くて嬉しか
りしと (佐久市) 里 香
園に立つ満蒙開拓少年の像に春の日癒すがごとく
(伊那市) 堀米 好美

佳作

病院のベットの夫に話そとあれこれメモる面会
前に (長野市) 吉口 広子
猫一匹雪風しのぐ軒下で夫婦のごく寄り添いな
がら (伊那市) 赤羽 正彦

選評

第一首、長野も大雪でたいへんでしょう。お見舞い申します。屋根に雪を載せたままの車が、角を曲がるとき遠心力が働いて、屋根の雪がみな落ちた。偶然に遭遇した事実をよく記述している。第二

首、目を病むのは深刻だ。お医者さんに処方された目薬を四種類も差している。簡潔な下句に作者の決意が伝わってくる。第三首、梅が大好きだがまだなっているのをみたことがない。かわいいな。

小島 なお選

ワルツよりややゆったりと振る君のメトロノーム
のような去り際 (塩尻市) いずみはる
寝返りてうつうつらの目を開ける五分五分なの
か半円の月 (千曲市) 宮川 恵子
「偶だから寄りな」と奥で姉の声 姿みえぬ温
かき風 (長野市) 松本 博人
思いつつ湯とうふを食むこれが父の最後に口にし
た固形物 (長野市) 原田りえ子
五輪前後ノ井戸舎の上空に防災防止のアドバル
ン上げし (長野市) 宮崎 雄
しゃべったね食べたよねって一泊を終えてそれぞ
れ日常へ行く (松本市) 川久保恵子
折紙を重ねて作る橋しま回せば橋がくるくる開く
毎朝の何故か目をやる訃報欄知らぬ人でもまた悲
しくて (松本市) 小松 久志
半世紀園児あそびしジャングルジム撤去の後にた
んぼは咲けり (佐久市) 木内利一郎
嘗て七人いまは一人の大鍋も便利で味噌汁三分
なり (小諸市) 尾沼美枝子

佳作

いつの間にかYouTubeでの「純烈」に惹か
れる婆になつてしまった (千曲市) 荒井よし子
窓過る土鳩の群をあそばせて如月の空はれわたり
なり (長野市) 池田よし江

選評

第一首、三拍子よりもゆるやかに手を振る君。そのリズムがゆるやかであるほど寂しい気がするのなぜだろう。第二首、五分五分と言われているが真実はどうなのか。月だけの話ではないのかも。

第三首、姿だけがそのひとではない。声や言葉の質感や空気全体で形作られる。「暖」ではなく「温」なのだ。第四首、白く柔らかくあたたかい豆腐の食感を通じて父とつながる。「固形物」が切ない。

米川 千嘉子選

友訪えはもの忘れしをり歩桜一緒に植ゑしが芽を
のびしをり (千曲市) 倉石みつる
マッチ売りの少女よ我も買いまししょう洗濯室はア
ラスカのように (千曲市) 関 津和子
寝たきりの介護のビデオ映されて調剤待てはひし
ひし孤独 (木祖村) 佐々木千代子
姉逝けば術後の夫はラインにて別れを告げる花の
祭壇 (坂城町) 横田 徳子
香り持つ花の乏しき季なれば老介護士が香焚きく
る (千曲市) 上原 博司
空き家増え独居老人なふえる三代同居はむらに
三軒 (長野市) 島田 伶子
「おじいちゃんよりいい男はそりゃいないけど」
ブラはつけるとデイの朝母は(長野市)原田りえ子
人生の伴侶なくした友人にかけ言葉はこの地球
に無し (千曲市) 荒井よし子
山羊乳と卵と粉のドーナツは下校の楽しみ母の
手作り (宮田村) 小田切孝子
早春の雪解け夜道コンヒニへ徐々にシューズは泥
にまみれる (伊那市) 赤羽 正彦

佳作

激怒せずおのれを抑制するとも老いの哀へなれ
ば悲しき (箕輪町) 向山 政俊
心もとなきそうにしてわれの短歌常連の中にひっ
そりと載る (佐久市) 桜井 輝子

選評

第一首、長年の交流のある近所の友か。一緒に植えたことを忘れても芝桜はまた花を咲かせてくれそう。第二首、介護施設などの洗濯室、室内でも厳しい寒さなのだ。少しのユーモアがかえって切実。

第三首、診察を終えて薬が出るのを待つ間、皆が今後の自分を思いつつビデオを見ている。その時こそ「ひしひし孤独」、というのが深い。第四首、告別式にラインで参加。便利さと切なさ。